＜中学校　教育相談＞

生徒の心に迫る教育相談

── 自己教育力を高めるかかわり──

具志頭村立具志頭中学校教諭　　山田　宏

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 61

Ⅱ　研究仮説 …… 62

Ⅲ　研究内容

1　過去における私の実践事例から

(1)　対象　中学３年　Ｋ男 …… 62

(2)　対象　中学２年　Ａ子 …… 63

(3)　対象　中学３年　Ｕ男 …… 64

2　生徒指導にあたる教師としての基礎的知識

(1)　思春期におかれている生徒の理解 …… 65

(2)　生徒の問題行動の要因についての理解 …… 66

(3)　生徒の問題行動の背景や形成要因についての理解 …… 66

(4)　人間として、基本的な、成長に必要なことの理解 …… 67

(5)　自己教育力の育て方 …… 68

(6)　カウンセリングマインドの必要性 …… 69

3　３事例を通しての指導に対する考察

(1)　事例に対しての反省 …… 70

(2)　まとめ …… 70

Ⅳ　課　題 …… 70

＜主な参考文献＞ …… 70

＜中学校　教育相談＞

生徒の心に迫る教育相談

── 自己教育力を高めるかかわり──

具志頭村立具志頭中学校教諭　山田　宏

Ⅰ　テーマ設定の理由

児童生徒の問題行動が年々増加し、いまや大きな社会問題になっている。そして、その原因を家庭・学校・社会に求め、さまざまな論議が生まれてきている。校内暴力やいじめによる自殺等、多難な問題を抱える昨今、個々の問題に対応していくのに、それぞれに苦慮している時である。私自身もいろいろな事例に遭遇し懸命に対応してきた。

Ｇ中学校でも、いろいろな問題行動が起こった。Ｋ男は、飲酒をして登校し、教師の目の前で喫煙、他校の生徒に対する暴力、教師に対する暴言、挙げ句の果ては対教師暴力までした。Ａ子は、何度も家出を繰り返し、飲酒・喫煙、とうとうシンナーにまで手を出した。Ｕ男は、服装の乱れ、教師不信、教師に対する挑発、結果的には卒業延期となった。経済的理由で、住居を転々としたＮ子は、満たされない寂しさのためか、他校の生徒との深夜徘徊、不純異性交遊、警察に何度も指導を受けることになった。

そういった問題行動が起きるたびに、担任・生徒指導担当として、私はその指導に苦慮した。例えば、学校中を落ち着かない雰囲気にしていたグループのリーダーＫ男とは、家庭訪問での対話を繰り返した。家出をしたＡ子を、生徒指導主任と深夜まで探し回り、真剣に父母、本人に相談を繰り返した。教師を挑発したＵ男に対しては、家庭訪問をし親を交えての話し合いを繰り返した。深夜徘徊を重ねるＮ子には、担任を中心に警察の少年係とも一緒になって指導にあたった。

学級担任・生徒指導主任の私の指導に対して、素直に行動をあらためることなく、「どうせおれは、わたしはだめだ」と、希望を持てずに問題行動を繰り返していったＫ男・Ａ子・Ｕ男・Ｎ子。自分なりに一生懸命やっているのだが、思うように効果の上がらない状態を見るにつけ、いらだちをおぼえた。その結果生徒に対する叱責が多くなった。しだいに「教師としてできることはやった」「あとはどうしていいかわからない」となげやりになった。挙げ句の果ては「この生徒さえいなければ……」と現実の問題から逃げてしまう姿勢がなきにしもあらずの状態になった。

振り返ってみると、生徒の内面への働きかけが不十分なため、どちらかといえば、その場限りの上すべりの指導となり、教師の自己満足の域をでなかった。背景・要因など問題の本質をつかむことができず、指導の手立てが具体的に立てられなかった。更に思春期におかれている生徒自身の心理的特性を知らず、単に教師としての正義感、倫理感でのみ対応してきたように思う。その結果、生徒の自己教育力を高めることができなかった。

沖縄県の不登校の生徒数は平成３年度から平成６年度にかけて､915名、957名、828名、835名とかなりの数にのぼっている。文部省の学校基本調査によるいじめや非行などによる「学校嫌い」が原因で、年間30日以上欠席した登校拒否（不登校）の小・中学生が、平成６年度は前年度より2,600名増え、過去最多の77,400名となった。島尻管内の中学校における校内暴力の発生率（学校総数に対する発生学校数）は平成５年50.0パーセント、平成６年58.3パーセントと増加している。少子化時代であるにもかかわらず、問題行動の数が増えている。率においては大きな増加であろう。上のような現状をみると、生徒の内面に深くかかわり、効果的な指導のできる教師になりたいと痛切に感じる。

さらに本県はカウンセリング５ケ年研修計画をはじめ種々のカウンセリング研修会を実施している。本県教育の現状と課題、中学校教育の目標の中にも「生徒の不安や悩みを解消させ、生徒一人一人の可能性を見いだし、人間的成長を図るため、生徒の内面に迫る生徒理解と、個別指導の充実を図るための教育相談の基礎的知識及び技術を教師が身につけることの大切さ」が掲げられている。

今までの反省から教育相談についてより深く研究し、生徒に対して自己教育力を高めるかかわりのできる教師になりたいと強く感じ本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

生徒指導にあたる者が、問題行動の背景・要因等の本質をつかみ、さらに教育相談の基礎的知識及び技術を身につけ、一人一人の心に迫る教育相談をねばり強く行っていけば、生徒の自己教育力を高めるかかわりができるであろう。

Ⅲ　研究内容

1　過去における私の実践事例から

(1)　対象　中学３年　Ｋ男

①　問題の概要

服装違反で登校し、注意をした教師に反抗した。無届けの遅刻、欠課、早退を繰り返した。勝手に授業を抜け出し、校内を徘徊した。学校の近くで数名の３年生男子生徒と、飲酒・喫煙をした。その際、指導のために駆け付けた教師に暴力をはたらいた。飲酒をして登校し教師の目の前で喫煙した。近隣校の生徒と集団乱闘し、相手に大怪我を負わせた。

②　家庭環境

父親、母親、兄、本人の４人家族。親は放任で教育に無関心である。

③　友人関係

Ｋ男を中心にして、５～６人のグループで問題行動を繰り返す。非行仲間をだれよりも大事にしている。

④　学校生活の様子

３年になってからの怠学による欠席は55日。遅刻41回。５教科の授業は居眠りが多く、あまりやる気がなく、実技教科などの好きなことには、熱心に取り組む。言葉遣いや行動が乱暴であるため、他の生徒からは怖がられている。

⑤　問題の理解と診断

Ｋ男は、中学２年の終わり頃より、友達の家に勝手に泊まり込むようになった。そこで飲酒喫煙をし、翌日学校を無断で休むという生活をするようになった。親は、教育的に無関心で放任し、本人のいいなりになるところがある。父に対する不信感から会話はほとんど交わされず、Ｋ男にとって家は安定した居場所ではない。外泊先での飲酒をする回数が多くなり、酔った状態で登校し、教師に対して暴言を吐いたりすることがあった。学業の挫折、居場所のない家庭、自己有用感や存在感の喪失、将来に対する不安等が彼の問題行動の原因と考えられる。

⑥　指導方針

ア　Ｋ男への声かけや面接を通して、信頼関係を築き、情緒の安定をはかる。

イ　具体的な目標を持って活動し、充実感、満足感を味わわせるようにする。

ウ　Ｋ男の進路に対する希望や考えを聞き、Ｋ男にあった進路相談を行う。

エ　親子の交流により、Ｋ男の情緒を安定させ、進路に対して目が向けられるよう家庭の協力を得る。

⑦　指導の経過

４月にＫ男とドライブをしながら、いろいろと対話をした。家庭のこと、父親のこと、好きな女生徒のこと等。校外での１対１の対話は、Ｋ男とのつながりを深める上で効果があった。強圧的な態度をとらず相手を受け入れ理解しながら話し合った。いろいろとＫ男の思いを聞くことができた。この日が本格的なかかわりの始まりであった。これがきっかけで、その後におこった問題行動の指導の際にかかわりやすかった。教師の注意を振り切って、勝手に校外に出ていったＫ男を追っかけて説得をした。投げやりな姿勢に対して、自分自身の中学時代にも同じようなときがあったんだと一所懸命話した。その後、授業に参加した。飲酒をして登校し、保健室で仲間と一緒に寝ていたＫ男を引っぱり出し、厳しく指導した。絶対に許せないと強く話した。その指導に対して不満があった。それに対しては全職員で対応した。教師の団結した姿勢があった。きびしく指導されると、欠

席が多くなった。そんなときは、家庭訪問を心がけた。なげやりな態度に、「やればできる」と励まし続けた。ある日の深夜、K男から電話が入った。「相談があるので、今来てほしい」という。駆けつけると、問題行動を繰り返している仲間と一緒であった。「僕たちはいろいろと問題行動を起こしているので退学になるのか、卒業できないのではないか、心配だ」と言ってきた。残された卒業までの日をきちんと登校し、落ち着いて授業に参加すれば大丈夫だと、励ました。その後、無事卒業して就職することができた。

⑧ 考　察

問題行動を繰り返す、K男の姿に、教師として大きく受け入れるゆとりがなかった。「問題の生徒だ、けしからん」「きびしく指導しなければ」という思いが強かった。なぜ、そういう行動をするのか、何を訴えているのか等、彼の心の動きや思いを理解することができなかった。

将来は必ず立派な人になれるのだと、生徒の可能性を信じての対話に心がけた。強圧的な態度ではなく、相手を理解しての対話。教師である自分自身の思いを訴える本音での対話に心がけた。それによって多少なりとも信頼関係が結べたように思う。

(2) 対象　中学2年　A子

① 問題の概要

夏休みに、友人の家に泊まり飲酒、喫煙をするようになった。生活のリズムが乱れ、2学期の始業と同時に、遅刻が多くなった。何度か、親に嘘をついて外泊をした。その後、2度家出をする。空き家などに寝泊まりすることもあった。そこで飲酒、喫煙をする。3学期に入ってさらに家出をし、村外で無免許運転し、保護された。その後、父親がA子を丸刈りにした。それが原因で、約2カ月登校できなかった。

② 家庭環境

父、母、姉、本人、弟2人、妹3人の9人家族。父親が病気で思うように仕事ができずに、経済的には厳しい状況であった。

③ 友人関係

境遇のよく似た怠学傾向の友人（中学2年女子）と行動を共にし、家出を繰り返す。

④ 学校生活の様子

2年になってからの家出による欠席は、67日。遅刻23回。人の意見を聞こうとせず、自分勝手な振る舞いが多い。授業中の態度は教師によって変わり、私語が多い。服装で注意を受けることが多かった。

⑤ 問題の理解と診断

A子は、夏休みに友人の家に泊まる機会が多くなった。そこで飲酒喫煙をし、生活を乱していった。派手な服装などに興味を示し、親に小遣いをねだるが、経済状態がきびしくA子の思うようにはいかなかった。その事に対しての、親への反発があった。不健全な交友関係、学業の挫折、自己有用感や存在感の喪失等も原因と考えられる。

⑥ 指導方針

ア　A子への声かけや面接を通して、信頼関係を築き、情緒の安定をはかる。

イ　具体的な目標を持って活動し、充実感、満足感を味わわせるようにする。

ウ　親との連携に心がけ、問題の背景、原因、対策について話し合う。

⑦ 指導の経過

A子に背中を叩かれる。A子はいたずらのつもりである。しかしその叩きかたが非常に強いためとても痛い。なぜこんなに強く叩くのだろうか。友人に対しても、鉛筆の先で背中をつつく。A子はいたずらのつもりである。刺された生徒にとっては痛くて大変である。どうしてこのような行動をとるのだろうか。A子の父は病気のため十分に仕事に従事できず、生活は厳しい。A子の姉は家出をしたために、父親に丸刈りにされたことがある。子供たちにとって父親は怖い存在の様である。A子は服装で注意を受ける事もあったが、明るく積極的な性格であった。親の許しを得て友人の家

に泊まるようになった。外泊が何回か続くと親は止まることに反対するようになった。無断で友人の家に泊まるようになった。その後は父親に怒られるのが怖くて何日も家に帰らない状態が続く。友人の家に泊まれない状況になると近くの空き家に寝泊まりするようになった。そこでは、A子の他に何名かの中学生が集まり、飲酒・喫煙の問題行動を起こしていた。家出が分かった時点で親との連携を心がけた。放課後の家庭訪問を毎日行い一緒に話し合い、一緒に捜し回った。何度目かの家出の時、オートバイを盗んで乗り回していた。この時、幸いにも警察に保護された。この後、父親に髪の毛を切られ、丸刈りにされた。父親は家出の罰と丸刈りにすることによって、家出をさせない考えであった。しかし、A子はショックと反発でまた家を飛び出した。この時の家出は約2週間続いた。親とは毎日連携を取り、手分けして捜した。生徒指導主任と一緒に村内の空き家をくまなく回った。警察にも捜索願は親から出されていた。友人からの情報をもとに、村外にも足をはこんだ。ある公園でA子を発見することができた。A子は頭を見られないようにフード付きの服を着ていた。見つけられた安心感からか大声で泣いた。その後、髪の毛が伸びるまでしばらくの間学校を休んだ。クラスの生徒にも協力してもらい家庭訪問を繰り返した。もともと明るい性格で行動は活発であった。担任である私との対話においてもしだいに元気を取り戻していった。地道な家庭訪問を繰り返し、親の心配している姿なども話していった。はがきによる励ましも続けた。

ある時、図書館でA子、母親、担任の3者で話し合いを持った。A子に対して心からの激励をした。真剣に話していくと涙がでてどうしようもなかった。その後からA子との信頼関係が深まったように思う。

⑧ 考　察

家出を繰り返すA子の姿に、教師として受け入れるゆとりがなかった。「なぜ、親に心配をかけるのだ、学校に心配をかけるのだ」「もし事故があったらどうするんだ」との気持ちが強かった。

なぜ家出をするのか、何を訴えているのか等、問題行動の背景・要因を追究することが弱かった。家庭訪問を繰り返して親との連携をはかった。一緒に解決していきましょうという姿勢に心がけた。相手を受け入れ理解し、教師である自分自身の思いを訴える本音での対話は信頼関係をつくる上で良かったと思う。

(3) 対象　中学3年　U男

① 問題の概要

男性教師に挑発的な態度をとる。飲酒をして登校する。下級生から金銭を巻き上げる。校内での喫煙。極端な違反の服装で登校する。他校の生徒に喧嘩をふっかける。教室の机や壁に「先生皆殺し」と書く。怠学。

② 家庭環境

父、母、姉2人、本人、弟2人の7人家族。父はU男の問題行動に対しては、強い体罰を加える。両親は、高校までは進学してほしいと強く思っている。

③ 友人関係

境遇のよく似た怠学傾向の友人と行動を共にする。リーダー的存在である。友人の不満をU男が代表して、訴えることがあった。

④ 学校生活の様子

3年になってからの怠学による欠席は123日。遅刻17。学習意欲がなく、教科書も開こうとしない。体育（運動技能）は優れている。2年の時から学校や教師に対する不満が見られるようになった。自己主張が強く、わがままな行動が目立った。

⑤ 問題の理解と診断

U男の住んでいる地域は漁村である。ハーリー（昔から地域に伝わる伝統行事）の後など、地域の先輩と飲酒をする機会があった。学業の挫折、自己有用感や存在感の喪失、将来に対する不安が原因と考えられる。

⑥ 指導方針

ア　U男への声かけや面接を通して、信頼関係を築き、情緒の安定をはかる。
イ　具体的な目標を持って活動し、充実感、満足感を味わわせるようにする。
ウ　U男の進路に対する希望や考えを聞き、U男にあった進路相談を行う。
エ　親子の交流によりU男の情緒を安定させ、進路に対して目が向けられるよう家庭の協力を仰ぐ。

⑦　指導の経過

2年の時に地区陸上の選手、サッカー部のエーススストライカーであった。U男を引率して何回か大会に参加した。

3年になり問題行動を頻繁に起こすようになった。その都度、1対1の対話をしていった。極端な違反服を着て登校しないように話すが、「この服でしか登校しない」とかたくなな態度であった。問題行動を起こすたびに1対1の対話を繰り返すが、なかなか効果はあがらなかった。ただ話は聞いてくれた。学校からの問題行動の連絡が重なると、父親がU男を登校させなくなった。「学校に行くと問題を起こしてみんなに迷惑をかけてしまう」と言う理由からである。漁師である父親がU男を、漁に連れていく期間が数日続いた。港で父親とU男の帰りを待ったこともあった。地域の区長、ＰＴＡの役員にも協力して貰い、一緒に家庭訪問をした。家に行く度に父親は「1年生の時も、2年生の時も何度となく学校に呼ばれては注意をうけた」「暴力を加えた後輩の家に詫びて歩いた」「どうせ学校に行かせても問題を起こすので休ませる」と。こちらから「どうか登校させて下さい」というと、「じゃ、先生が責任を持ちますか」との答えが返ってくるという状況であった。父親には、これまで何度も指導されてきた、今後は注意を受けたくないという強い気持ちがあった。

ある時は親の許しを得て、夜U男とドライブをしながらの対話をした。何とか目標を持って学校生活をしてほしいと励まし続けたが、U男の行動を変容させるには至らなかった。

⑧　考　察

問題行動を繰り返すU男の姿に、教師として大きく受け入れるゆとりがなかった。なぜ、そういう行動をするのか、何を訴えているのか等、U男の思いをつかむことができなかった。

担任を中心にして、地域の区長、ＰＴＡの役員にも協力して貰い粘り強く家庭訪問をした。何度も両親を交えての話し合いをしたことで、U男との信頼関係が多少なりともつくれたと思う。

2　生徒指導にあたる教師としての基礎的知識

以上の3事例から、教師としての自分自身の関わりの何が良かったのか、どこがいけなかったのかを考えてみたい。

まず、何といっても生徒理解が十分ではなかったというのが大きな課題である。

それを解決していくために、

(1)　思春期におかれている生徒の理解
(2)　生徒の問題行動の要因についての理解
(3)　生徒の問題行動の背景や形成要因についての理解
(4)　人間として、基本的な、成長に必要なことの理解
(5)　自己教育力の育て方
(6)　カウンセリング・マインドの必要性

以上6点について、研究を深める。

(1)　思春期におかれている生徒の理解

近年、思春期に着目した書物や研究論文が出され、思春期やせ症等、新しい概念が出されている。問題行動を起こしやすい思春期の生徒たちを担任している者にとって、思春期の特性等をより理解することが今後の指導にも役立つと考え、次にまとめた。

①　思春期の始まりとその特徴

精神的な成長の段階として、思春期にどのような変化が起こってくるだろうか。

ア　親に依存して、親に面倒を見てもらい、色々なことを決めて貰っていたのに、それでは居心地が悪くなり、とにかく自分でやろう、口出しはして欲しくない、と感じ始め自立しようという動

きが出てくる。

イ　親の価値観だけが正しいわけではないということに気づき、親の価値観を離れ、自分なりの価値観を持とうとする動きがでてくる。

ウ　それとなく親に対して感じていた疑問や反発がはっきりとしてきて、親に対してそれをぶつけていけるようになってくる。

エ　親が子供の手助けをできる部分が少なくなり、子供が親を頼りにしなくなっていく時期である。

オ　仲間との関係が密になっていく時期である。

カ　わけがわからないけれど親に反発したくなる。

キ　わけがわからないけれど、もやもやする。いらいらする。

以上のことから、思春期の子供（生徒）に対して、親や教師の考えを一方的に押しつけることは、お互いの衝突を招く結果になりやすいと思われる。これまでの体験からも、教師として強圧的な態度から生徒の反発があり、生徒の「自己教育力」「やる気」をなくしたであろうということがあった。

②　思春期の問題の現れ方

ア　非行などの問題を起こす生徒の場合

繰り返し問題行動を起こしていった生徒たちは、落ちこぼれて親や教師に見放されたという感じを受け、学校の中には自分たちの居場所がなくなってしまったように思い、それ以外のところで自分にとっての意味ある何かを見つけよう、得ようとしたのではないか。親や教師の代わりとなる依存対象を求めたり自分が安心できる居場所、自分を認めてくれる仲間を求めて学校や家庭以外の場所に出ていったように考えられる。

これまで繰り返し、問題行動を起こしていったK男、A子、U男、N子は、突っ張っているように見えても、本当は誰かに受け入れて貰いたいという思いの強い、また自分の主張はあまりできない生徒達で合ったように思われる。

(2)　生徒の問題行動の要因についての理解（枯れ枝）

図2は、問題行動とその背景、形成要因の関係を簡単に表したものである。両者の関係は、いわば地上に立つ樹木の例に例えられる。外見で分かることは、地上の部分として表れている枯れ枝（問題行動）である。葉が落ちた枝もあれば、害虫に侵されている枝もある。これまでは、表面的に見える部分（問題行動）にだけ目を奪われてしまい、外側からだけ、それを制止したり押さえたりすることにとどまってしまった。その背景や形成要因にまで深く目を向けた指導が十分には行われていなかった。

「なぜか」という、図の地下の部分、すなわち、養分の不足・土壌の悪化・水の不足（問題行動の背景や形成要因）にまで深く目を向けた指導をすることができない傾向があった。したがって、今後、生徒の問題行動の理解にあたって、この点、 つまり問題行動の背景や形成要因についても十分な配慮をすることがきわめて重要である。

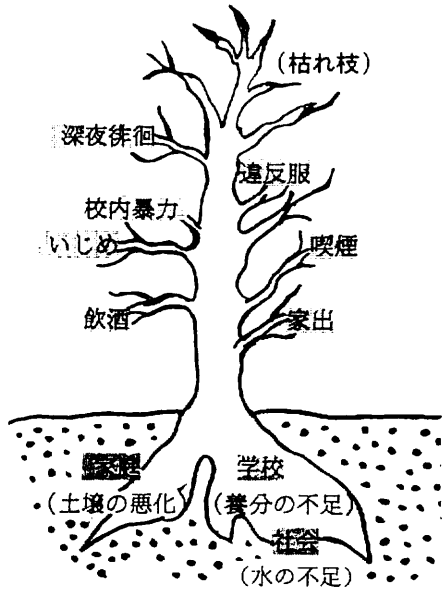

図2

(3)　生徒の問題行動の背景や形成要因についての理解

生徒の問題行動の背景や形成要因は複雑多岐にわたっている。反社会的問題行動諸要因として、本人の要因・家庭的要因・学校要因が考えられるが、それらを理解するために佐賀県教育センター『研究収録』昭和56年度を参考に考えてみた。

①　家庭的要因の例

ア　父親　(ア)　厳格すぎるか、冷淡で放任　(イ)　一貫性がない養育態度　(ウ)　気分屋で暴力傾向

イ　母親　(ア)　溺愛　(イ)　盲従　(ウ)　拒否　(エ)　無視放任　(オ)　一貫性がない養育態度

ウ　家庭力動　(ア)　不一致　(イ)　不和

エ　家庭教育の指向性　(ア)　教育的に無関心　(イ)　物質や金銭で子供をつなぎとめる
(ウ)　安易に独立部屋を与える

オ　親子感情　(ア)　家に帰っても面白くない　(イ)　親父は頑固でわかってくれない
(ウ)　いいかげんなくせに、子供にばかりうるさい

②　学校要因の例

ア　教師のタイプ　(ア)　不公平　(イ)　出来ない子、従わない子、一度でも悪いことをした子を無視したりきめつけたりする　(ウ)　強圧で一方的　(エ)　悪いことは悪いと指導できない

イ　学校生活全般の中で　(ア)　学業の挫折（落ちこぼれ）　(イ)　自己有用感や存在感喪失
(ウ)　共通理解がない教師集団

ウ　校風について　(ア)　正直者が馬鹿を見ることが多い
(イ)　温かみ、思いやりのない紋切り型の生徒指導

エ　対教師感情　(ア)　一方的に決めつけられた　(イ)　皆の前で恥をかかされた
(ウ)　不公平な扱いをされた　(エ)　「これも知らないか」といわれ、やる気をなくした　(オ)　レッテルをはられた

オ　学業について　(ア)　勉強がわからない　(イ)　授業がおもしろくない　(ウ)　学校がおもしろくない

以上の様にまとめられている。

(4)　人間として、基本的な、成長に必要なことの理解

なぜ繰り返し問題行動を起こしていったのか。どこに原因があったのだろうか。アメリカの心理学者のマズローの考え方（図１）をもとに考えてみた。

マズローは、子どもが心身ともに健康に育っていくためには、いくつかの欲求があって、それが下から順番に満たされていかなければならないといっている。

その中で一番大事なものが四つあって、それを基本的欲求という。

順番に述べると、１生理的欲求、２安全の欲求、３所属と愛情の欲求、４自己尊重の欲求の四つである。この上に、さらに５知ることと理解することの欲求、６審美的な欲求、７自己実現の欲求がある。これは、まず下のものが満たされると、その次の欲求が現れてきて、それが満たされると、その上の欲求が現れてくるというように、順次高い欲求に進んでいくということである。

はたして、繰り返し問題行動を起こしていった生徒の基本的欲求は満たされていただろうか。

一番下の生理的欲求だが、これは人間という生物にとって最も基本的で、最も強い欲求である。なかでも大事なものは、食事と睡眠である。子どもがおいしくモノを食べ、気持ち良く寝たりさわやかに目覚めたりできるように親は努力をしなければならない。まともに住む家もなかったN子には、満たされていない日々が続いていた。二番目の安全の欲求は、生理的欲求が満たされると、子どもは安全が保障され、秩序だった生活の場を望むようになる。言うまでもなく、家というものは子どもにとって非常に安全な場所でなければならない。

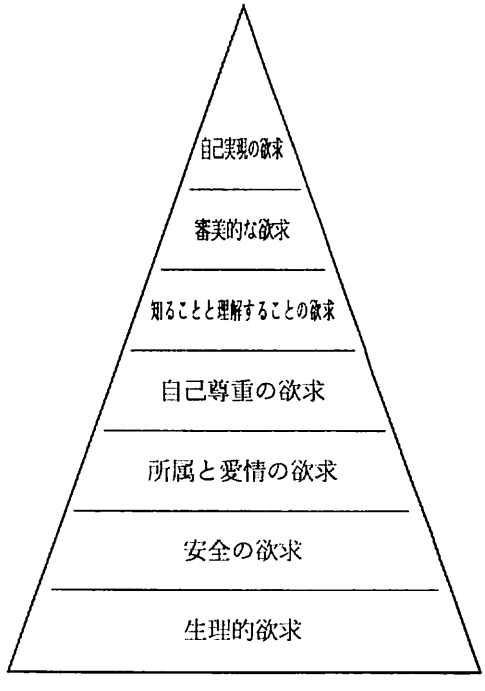

図１　欲求の階層（マズローによる）

親の反対を押し切って、何日も友人宅に寝泊まりしたK男・家出を繰り返したA子・またN子にとっても満たされなかった欲求であった。三番目の所属と愛情の欲求は家族の一員として認められたい、可愛がってもらいたい、いろいろ世話をしてもらいたいというような欲求である。父親に叩かれたり、

女性でありながら丸刈りにされたA子にとって満たされていない欲求ではなかっただろうか。N子はこの欲求も満たされなかった。家をクラスに、家族を級友に置きかえて考えてみるとどうだろうか。問題行動を繰り返し起こしていった生徒の多くが、クラスの中で疎外感を味わっていた。特に3年生ともなると、まわりの生徒は受験勉強に励んでいく。その流れのなかに入れないで、学校を休むようになった。そして問題行動を起こしていった。それに対する積極的な対策の一つとして、昼休み時間にクラスマッチのサッカー大会・バスケットボール大会を行った。放課後には教員チームとの野球・サッカーの試合を行った。その試合に多くの教師が応援にかけつけ、生徒を励ましていった。学習に対しては興味関心を示さないが、スポーツ大会には喜んで参加し、それぞれの担任に誉められ、認められている生徒の姿が印象的であった。目的・目標があると、怠学ぎみの生徒も登校してきた。学級担任として、クラスのどれだけの生徒がこの所属と愛情の欲求を満たしているのかを十分に把握する必要がある。四番目の自己尊重の欲求は、人から誉められたいという欲求である。そして、誉められることから自尊心が育っていく。自信がついていく。それがヤル気の原動力になって、生活全般に張りあいが出てくるのである。K男・A子・U男・N子4人とも、叱責・注意を受けることが多かった。その結果、本人たちの自尊心・自信を育てることができなかったのではないか。そして「自己教育力」につながるヤル気を奪ってしまったことにはならないだろうか。

この四つの基本的な欲求が満たされて、初めて知ることと、理解する欲求が生じてくる。特に知的な学問なんかに興味をもつようになるだろうというのがマズローの考え方である。

(5) 自己教育力の育てかた

自分で自分の心を導き、自分で自分を律し、自分で自分の生活をよくしようと志す－自己形成力、自己教育力を子供の心の中に育てないかぎり、絶対に生活の自立－ひとり立ちはできない。

子供に自分の生活づくりの心を育てるということは、具体的にどういうことなのであろうか。それについては、次のことを考える必要がある。（『自己教育力を育てる指導の実際』稲川三郎著）

① 自分を見る心を育てる（自己評価力）

「自分を見る」ということは、自分自身を知り、自分というものについての正しい評価ができるということである。「汝自身を知れ」ということは、人生を哲学する基本である。

ア 自分の今とっている態度はどうなのであろう。他人にどういう思いをさせているだろうか。

イ 自分の態度や行いについて親や教師や友達から、よく言われることはどんなことだろうか。なぜ、注意されるのだろうか。

というようなことを考えさせ、気づかせる必要がある。

② 自分に立つ心を育てる（自己立脚力）

「自分に立つ」ということは、自分のものの見方、考え方、行い方をはっきりさせ、自分はこう考える、こう思うというように、主体性を確立するということである。正しいことを正しいとし、善なることを善とし、美しいことを美しいと、正しく見る目を持ち、その自分の心を大切にし、それを貫く心を持つということである。

ア 何か事に処す場合、他人の考えや、意見に引きずられようとしているか。

イ 自分は正しいことを正しいとし、よいことをよいとする目を持っているか。

というようなことを、ふりかえらせ、自分の考えを大切にし、その考えを生かすという主体性に立つ心を育てる必要がある。

③ 自分を深める心を育てる（自己深化力）

「自分を深める」ということは、自分の知性・教養を高め、識見を豊かにするということである。人間的に巾の広い、ゆとりのある心を育てるということである。

ア 物事に対処するとき、いろいろな考え方をし、熟慮してそのことを決めるやり方をしているか。

イ いろいろな人々の考えをよく聞き、その善し悪しを判断する力があるか。

というようなことを反省させ、ものの見方や、考え方、処し方に巾広く対処することができるよう、知識や教養を高め人間性を豊かにさせる必要がある。

④　自分でする心を育てる（自己行動力）

「自分でする」とは、自分の考えに立って、実践することである。どんなに正しく、善くても、ただ心に思っただけでは、意味がない。それを自分の心に立って行動に移すところに、考えはさらに明確になり、生活は確立する。

ア　自分は教師からこうせよとうながされたことに対して、どういう行動をとっているか。

イ　両親から何かを言いつけられたときに、どういう行動をとっているか。

等をよくふりかえらせ、正・善と思ったことに対してはどこまでも信念に立って貫くこと、また不正不善に対しては、きっぱりとそれを断ち切る勇気を持たせるように、心がけさせる。

⑤　自分を築く心を育てる（自己形成力）

「自分を築く」ということは、自分の人間性を成長させようとするいとなみである。確かに人間は最初から立派なものはない。さまざまな修養を通して、一歩ずつ人間性を深め、人柄を育てていくのである。その場合、意識して修養しようとするかどうかによって、成長への高まりが見られることに気づかせ、その実践をうながすことが必要である。

ア　人柄の立派な友達を見て、どこが良く、どこを見習う必要があるかを考えた事があるか。

イ　自分は前はこうだったが、今はこのように良くなっていると考えられる点があるか。

というようなことについて考えさせ、一歩ずつとも、自覚に立って、自分の人間性を高める努力を促す必要がある。

(6)　カウンセリングマインドの必要性

一般的にいって教師は自分の考えを一方的に押しつける傾向が強い。これは教師側の価値基準に照らして、しつけ、教え、指導するという管理訓育的指導であり、これに対して、生徒の能力を引き出し、育てる面の指導、自己指導を促すカウンセリング的機能は、生徒を信頼することによってその力が発揮される。この二つの機能は、車の両輪のように機能している必要がある。一人ひとりの教師の役割の中においても同時に機能しているものでなければならない。しかし、学校現場では、問題行動を生み出す背景や形成要因には十分に目が向かず、生徒を叱責するなど外的に規制する指導が全面に出すぎている傾向がある。カウンセリング機能は影をひそめバランスを欠いた状態ではないだろうか。

大切なのは、子どもとの間に心の通い合える関係を築くことである。教師の価値観を一方的に押しつけるのではなく、まずは生徒の感情を温かく肯定的に受けとめることから始めるべきである。そうすることによって生徒の教師に対する警戒心はほぐれ、生徒は気持ちを解放して自らの姿をあらわすことになる。そして、生徒は自ら深く見つめ、洞察し、反省し、行動変容が期待されるのである。このようなかかわり方がカウンセリング・マインドを生かした指導といえる。カウンセリングの専門的な技法にとらわれず、あらゆる活動の場で、すべての生徒を対象に、すべての教師によってなされるカウンセリング的配慮を生かした指導が必要といえる。

3　3事例を通しての指導に対する考察　－生徒理解の基礎的考えをふまえて－

	家庭的要因	学校要因
K男	教育的に無関心・一貫性のない養育態度 盲従・家に帰っても面白くない	学業の挫折・自己有用感や存在感喪失
A子	暴力的傾向・家に帰っても面白くない 父親は頑固でわかってくれない	自己有用感や存在感喪失・勉強がわからない・学校が面白くない
U男	暴力的傾向・教育的に無関心・盲従 父は頑固でわかってくれない	無視したりきめつけたりする・強圧で一方的・学業の挫折・自己有用感や存在感喪失

N子	一貫性がない養育態度・物質や金銭で子供をつなぎとめる・家に帰っても面白くないいいかげんなくせに子供ばかりにうるさい	自己有用感や存在感の喪失・勉強がわからない・学校が面白くない

(1) K男・A子・U男・N子に対しての反省

① 教師としての正義感・倫理感による高所からの指導が多かった。

② 積極的に生徒を理解し、心から彼らの主張に耳を傾ける姿勢が十分ではなかった。

③ 今、何をして上げればいいのか、何を求めているのか、何を言いたいのかを分かろうとしなかった。その結果人間関係が育てられなかった。

④ 表面的な問題行動にだけ目を奪われてしまい、外側からだけ、それを制止したり押さえたりすることにとどまってしまって、その背景や形成要因にまで深く目をむけた指導が弱かった。

⑤ 良さを育てていくための、条件を備えた場の設定と機会を与えるのが不十分であった。

⑥ 家庭との連携が十分に結べなかった。

(2) まとめ

学業の挫折・学校での自己有用感や存在感の喪失、また、教師の配慮を欠いた言動や悪い生徒であるとのきめつけが、問題行動の一因になっている。そのことを考えるとき、教師としていかに生徒を理解し、その上に立っての教育的かかわり、カウンセリングマインドを持ってのかかわりが重要なことかがわかった。

さらに、問題行動の背景や要因は、生徒との関係の深まりの中で、理解され改善へと向かうと考える。心理検査・観察・資料の活用も有効であるが、教師が個々の生徒との関係を深めることなく、客観的な理解にとどまってしまうと‘つめたい尺度’で子供を測定することになり、効果的な指導に結びついた理解とはなり得ない。このことから、問題行動の多発している教育現場において重要なことは、生徒の家庭における養育態度・本人の身体的要因・発達の特性・心理的特性・学校における適応の状態などを温かく理解しようとする教師の姿勢である。

カウンセリングマインド的手法を持った教育相談が有効である。呼び出して行う教育相談・チャンスをとらえて行う教育相談・定期的に行う教育相談・自主来談による教育相談を積極的に行うことが大切である。そのねばり強い実践が、生徒とのラポートを深め、自己教育力を高めるかかわりとなりひいては、問題行動を未然に防ぐことにもつながっていくのではないだろうか。

Ⅳ 課 題

1 学校全体の積極的な指導体制を、どう確立していくか。

2 学校だけでは、根本的な解決にはならないので、家庭や地域との連携をどう図っていくか。

3 問題行動が増加し、大きな社会問題になっている中で他機関との連携をどう図っていくか。

<主な参考文献>

稲川三郎著	『自己教育力を育てる指導の実際』	黎明書房	1990年
沖縄県教育委員会	『本県教育の現状と課題』	沖縄県教育委員会	1991年
人間教育研究会	『子供に何かが起きている』	第三文明社	1990年
小室節雄・今橋盛勝著	『北風より太陽を』	学陽書房	1992年
坂本昇一著	『<やる気>の生徒指導』	小学館	1986年